

## 「気候と人々との暮らしへのかかわり」をテーマとして興味・関心を高める授業実践

栃木県高等学校教諭

### 1. はじめに

「初対面の人と会話をするときにどのようなことから会話をはじめ？」と生徒に質問をすると、いくつかの答えが返ってくる。そのなかには「今日は暑いね～」などと天気についての会話をするという生徒がいる。それでは、初対面の人とでも話題にできる「気候」について学習することを告げ、本題に入る。

### 2. 導入

「気候についての学習をしようと思ったけれども、普段の天気予報では気候とは言っていないよね。どうしてかな～」などと質問すると、「そういえばそうだな～」と興味をもってくれる。気候の意味についての説明を終えたところで、『高等学校 世界地理B』（以下教科書）の表裏表紙とp.1扉のページの写真(写真1)、p.26の写真(3枚は同じ写真)を見せる。



(写真1)『高等学校 世界地理B』 p.1

すると「ギリシャの…」写真であることを思い出す。最初の授業で、簡単な説明をしておく、そのことを思い出すはずである。しかし、「気候との関係についていくつか質問すると、私が意図するような答えが返ってこない。そこで教科書p.26や『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2008』（以下資料集）のp.24を開いてもらい、説明をしていくと、「なるほど～」と納得した生徒の様子をうかがうことができる。いよいよ、ここから勝負である。

天気の話をするとき、話題にする内容を聞いてみると、「気温・降水量・風」など、ほぼ気候要素についてであることがわかる。ここまで話が進めば、ケッペ

ンの気候区分を熱帯から概観していきたいと思う。ただしここでは、アルファベット順に概観していく。

### 3. 本題

#### 熱帯 (A)

まず、熱帯の気温の条件とはどんな条件かを質問してみると、たいていの生徒は30℃以上の数字を答えてくる。そこで、最寒月平均気温が18℃以上であるという話をする、「考えていたより相当低い」という生徒がほとんどである。一日の平均であり、熱帯地域でありながらも比較的過ごしやすい時期もありうることを告げる。しかし、18℃以上の高い平均気温になる日が多いのが熱帯であることも確認する。ここで、資料集p.20の「②熱帯雨林の村」(写真2)やp.21「④キリマンジャロ山麓の雨季と乾季」(写真3)などの写真から、同じ熱帯でも熱帯雨林気候とサバナ気候では違いがあることを写真を通し、気がつかせる。また、高床式住居に住んでいる理由を考えてもらうことが、生活と結びつけることになり大切である。



(写真2)『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2008』 p.20②

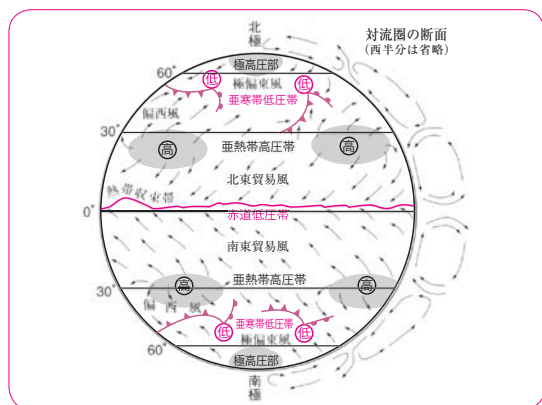


(写真3)『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2008』 p.21④

#### 乾燥帯 (B)

乾燥帯は「暑い・砂漠・ラクダ・オアシス」などの

イメージをもっている生徒が多い。しかし、なぜ、乾燥してしまうのかが理解できていないことが多い。そこで、資料集p.22、23「③砂漠気候の成因」と図を利用し、成因を理解させることが大切である。成因についての理解ができたと判断できれば、資料集の同じページや『新詳高等地図（初訂版）』（以下地図帳）で、サハラ砂漠・アタカマ砂漠・ゴビ砂漠・パタゴニアなどの位置を確認する。さらに教科書のp.20「②大気循環の模式図」を利用し、亜熱帯高圧帯について確認



(図1)『高等学校 世界地理B』p.20②

したい。また、地図帳のp.109～112の気候(一)(二)を使用し、具体的な海流や気圧・風向を確認し、理解を深めさせる。ここで農業についても簡単にふれてみる。基本的なことをおさえたい。たとえば、米についてだがエジプトでも生産されていて、しかも生産量が比較的高く、輸出まで行っていることにもふれてみる。なぜ、生産が可能なのか疑問をもたせたい。また、ステップ気候では、大規模に小麦の栽培が行われていることにもふれておきたい。

### 温带(C)

温带は私たちが生活している気候帯であるため、身近な話題から理解を深めさせたい。私が勤務する学校は那須塩原市にあり、勤務校付近は標高235m程であるのだが、同じ市内の三本岳岳付近は標高1900mを超える。生徒の通学範囲も広いことから、気候に違いがあることを知ってもらい、関心を高めさせる。温带の条件を確認し、具体的な区分に入っていく。まず、温暖湿潤気候と西岸海洋性気候であるが、資料集のp.25や教科書のp.27の雨湿図を活用し、東京とロンドンを

比較したときに何が違うのか考えさせる。とくに夏の違いについて考えさせる。同じ温带でありながら、東京とロンドンの最暖月平均気温が10℃も違うことがわかるはずである。また、降水量の違いにも気がつくはずである。さらに、教科書p.28「③クリスマスのかざりつけをされた12月のプエノスアイレス」(写真4)から東京と同じ気候区にもかかわらず、クリスマスの時期に半袖の洋服を着ている人がいるのはなぜか考えさせたい。



(写真4)『高等学校 世界地理B』p.28③

次に温暖冬季少雨気候であるが、生徒にとってイメージがつかみづらいようである。そこで、地図帳のp.109、110を利用し、サバナ気候との位置関係に注目してもらおう。すると、温暖冬季少雨気候区がサバナ気候区の高緯度側にあり、気温の差が熱帯と温帯の差であることがわかる。また、「w」の意味がわかるはずである。さらに、資料集のp.25「⑨茶畑」(写真5)などを参考に農業との結びつきについても簡単にふれてみたい。とくに、資料集に関連する内容がページで示されているので、これを活用させたい。活用するうえで、関連する内容が多いことに気がつけば、気候の授業を理解することは大切であるとわかるはずである。

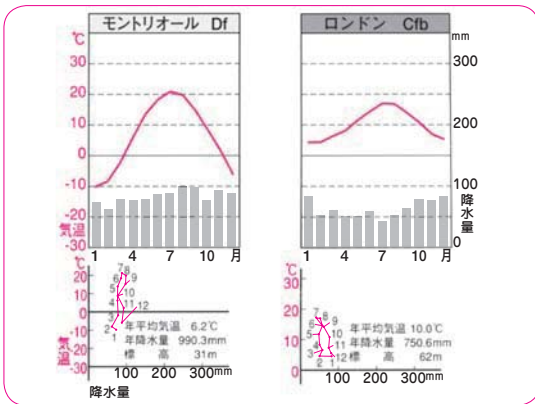


(写真5)『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2008』p.25⑨

続いて地中海性気候であるが、気候の授業に入るときにふれたことを確認する。また、亜熱帯高圧帯についても確認したい。そして農業であるが、気候と大きく関連していることを資料集p.106「10 ヨーロッパの農業」を参考に考えさせたい。

## 亜寒帯（冷帯）(D)

亜寒帯（冷帯）気候（以下亜寒帯気候）のイメージについて質問してみると、とにかく寒いという答えが多く返ってくる。もちろんそれは、間違いではないが、夏の平均気温が10℃以上になることが意外であると思っている生徒が多い。そこで、教科書p.31のモントリオールの雨温図と教科書p.27のロンドンの雨温図を比較してもらおう。すると、亜寒帯気候であるモントリオールの方が暖かいことが確認でき、亜寒帯気候の夏の平均気温が高くなることが理解できる。また、年較差についても理解ができる。さらに、夏の暖かい気温を利用し、小麦などの生産が行われていることを



(図2) 『高等学校 世界地理B』 p.31、27

資料集p.26から理解させたい。もちろん、農業ができない亜寒帯気候があることも資料集 p.27のトピックにて確認することも忘れないようにしたい。亜寒帯湿潤気候と亜寒帯冬季少雨気候の分布を地図帳の p.109～112の気候(一)(二)で確認すると、この気候が北半球のみに分布することや、地形の影響や気圧の影響などを確認できる。また、資料集 p.117「b高床式の住宅」(写真6)を利用し、高床式の住宅で生活する理由を



(写真6) 『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2008』 p.117

確認し、熱帯地方での高床式の住居との違いについて考えさせたい。

## 寒帯 (E)

寒帯については寒いイメージをもっている生徒が多いのだが、資料集p.27夏のツンドラでのトナカイの遊牧(写真7)からツンドラ気候の下ではトナカイの遊牧が行われ、夏にはコケ類などが育つことをつかませたい。



(写真7) 『図説地理資料 世界の諸地域NOW 2008』 p.27⑥

また冰雪気候である昭和基地においても部分的に地表が顔を出すことをつかませたい。南極大陸については地図帳の p.79を利用し、西側の南極半島は環太平洋造山帯の延長にあたり、平均標高が高いことや鉄などの鉱産資源が豊富であることを確認する。さらに東側や大陸の大部分が安定陸塊に属することも確認したい。また、南極の大陸氷河が陸地の上にあることは何を意味するのか考えることにより、環境問題についても意識づけをさせることができる。

## 4. 最後に

気候を学習することにより、世界の衣食住や農業・産業などに様々な関連性があることに気がつくことができる。どこまでを理解してもらうかは難しいが、時間のある限り、関連性があることについては指摘し、生徒の興味・関心を高めたい。今回は、気候区分に用いる記号や乾燥限界値または植生や土壌を取り上げることはなかったが、とくに気温を意識しながら、農業と住居を中心に関連性を取り上げてみた。写真資料から気候や人々の暮らしを理解することができれば、一層、好奇心をもって学習することができると思う。よって、今後も自分自身が様々なスキルを身につけ、様々な国・地域を訪れるなど研鑽を積み、写真資料を活用できるようにしたい。そして、地理を学ぶ楽しさと同時に写真が訴える重要性を伝え、考える力を身につけた生徒を育てていきたい。